

ソグディアナの都市を探る

—ウズベキスタン共和国クルドル・テパ遺跡発掘調査(2023年度)—

村上 智見 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター特任助教
ベグマトフ・アリシエル サマルカンド国立大学准教授
サンディボエフ・アリシエル サマルカンド考古学研究所研究員
マハマディエフ・ガイラット サマルカンド国立大学博士後期課程
アリモフ・ナヴルズ サマルカンド考古学研究所博士後期課程
ベルディムロドフ・アムリディン サマルカンド考古学研究所上席研究員
寺村 裕史 国立民族学博物館准教授
宇野 隆夫 帝塚山大学客員教授
末森 薫 国立民族学博物館准教授
押鐘 浩之 大阪大学特任准教授

Exploring Urban Centres in Sogdiana: Excavations at Kuldor-tepa in Uzbekistan (2023)

MURAKAMI, Tomomi Assistant Professor, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
BEGMATOV, Alisher Associate Professor, Department of Archaeology, Samarkand State University
SANDIBOEV, Alisher Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology
MAHAMADIEV, Gayrat PhD candidate, Samarkand State University
ALIMOV, Navruz PhD candidate, Samarkand Institute of Archaeology
BERDIMURODOV, Amridin Senior Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology
TERAMURA, Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology
UNO, Takao Visiting Professor, Tezukayama University
SUEMORI, Kaoru Associate Professor, National Museum of Ethnology
OSHIKANE, Hiroyuki Associate Professor, Osaka University

1. はじめに

本プロジェクトではソグド人の歴史と文化を明らかにするため、2023年度からウズベキスタン共和国クルドル・テパ遺跡において発掘調査を実施している。本年度は春と秋の2回に分けて発掘調査を実施した。

今回の調査では、クルドル・テパの城壁外に位置する小型の円形丘(テパ)を調査対象に選定した。当該テパは周囲がタバコ畑として利用される中、破壊を免れていたものである。城壁の外側にありながら、シタデルからもよく見える位置にあるこのテパは、何らかの重要な役割を持って築かれたものと考えられたため、クルドル・テパ遺跡の性格を明らかにする上で重要と考え調査を実施した。その結果、6~8世紀頃のゾロアスター教寺院と推測される建造物が確認された。

2. 遺跡の概要

クルドル・テパ遺跡(39° 29' 38N 67° 10' 10E)は、サマルカンド州ウルグット地区にある都市遺跡であり、

サマルカンド市(アフラシアブ遺跡)から南東におよそ25 km に位置している。長方形の城壁に囲まれたシャフリスタンと、城壁から張り出した独特な形状を持つ円形シタデルからなり(図1、2)、遺跡全体の面積は確認できる範囲だけでも17 ha に及ぶ。城壁外には小型の円形丘(テパ)が数か所見られ、これらは現存するクルドル・テパの城壁外市街地を形成していたと推定される。

クルドル・テパ(直訳: 奴隸を持つ丘)のソグド期の名称は不明であるが、史料に見られる都市国家「米国(マイムルグ)」における重要な地域であったと考えられている。遺跡を含む一帯は地元の人々によって「マイマナック」とも呼ばれている。「米国」はソグドを形成するおよそ七つの都市国家のうちの一つであり、漢文史料には昭武九姓の一国として登場する。今から2世紀ほど前から、アラビア語およびペルシア語史料に言及される都市「マイムルグ」は「米国」と同一であると考えられてきた。

漢文史料では、「米国」の中央である王宮および都



図1 クルドル・テパ遺跡とトレンチの位置
(1～4は1955～57年；5は2018年；6～7は2019年。8は2023年)

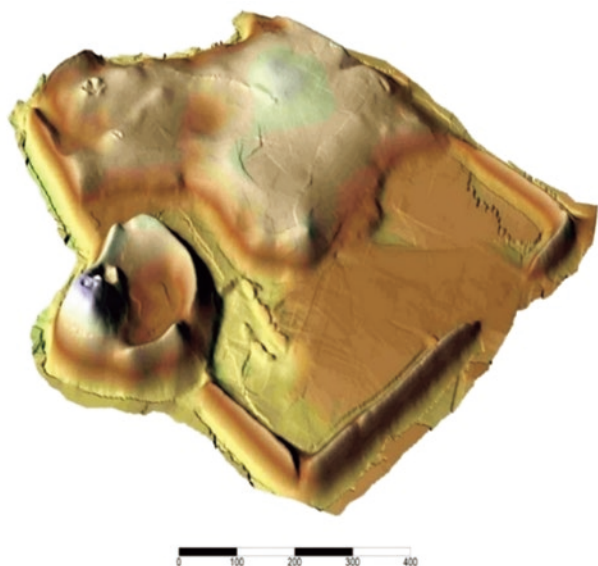


図2 シタデルとシャフリスタンの鳥瞰図(Saidov et al. 2019: 図1、2を一部改変)

市のことを「鉢息徳(puāt sjæk tək)」と呼んでいるが、現存するどの遺跡を指すのかについては、長い間議論の対象となってきた。これまでのところ、ペンジケントとクルドル・テパの二つの遺跡が有力候補として挙げられているが、両説は拮抗しておりいまだ結論は出ていない(Begmatov 2021)。当該遺跡を1950年代に

発掘したスタウイスキラをはじめとする学者らは、クルドル・テパが「鉢息徳」であるという説を提唱している(Staviskiy and Urmanova 1958; Staviskiy 1960)。遺跡の規模や形状などを考慮すると、クルドル・テパは米国(マイムルグ)において重要な役割を持った都市であったと推測される。

3. これまでの調査

1954年にV. I. サリアニディが、続いて1950年代後半にスタウイスキラとウリノヴァらが主にシタデルとシャフリスタンを中心に発掘調査を実施した。これらの調査の結果、クルドル・テパにおいて確認できる最も古い時期は紀元後1世紀頃であり、3～4世紀頃に発展し、7～8世紀頃に繁栄したとしている。8世紀にはクルドル・テパは廃墟となったとされるが、シタデルの調査からはカラハン朝期(11～12世紀頃)の生活の痕跡が確認されている(Staviskiy and Urmanova 1958; Staviskiy 1960)。

50年代以降、当該遺跡が本格的に調査されることはなかったが、2018・2019年にシャフリスタンの城壁とシタデルの城壁を中心に小規模の調査が行われ、50年代に出された研究成果および推定年代を支持する結果が示された(図1)(Berdimurodov et al. 2018、Saidov et al. 2019)。

4. 円形丘(トレンチ8)の調査

本調査対象の円形丘(テパ)は、城壁の南西角から約115m南西に位置しており、高さ約9.5m、直径約27mの小ぶりのテパである。テパの頂部にトレンチ8を設けて表土を剥ぐと、北東部から厚さ約2.1mの壁と、その北側に三つの小部屋(Room 3・4・5)が確認された。壁を構成する日干しレンガのサイズ(約50×25×9cm)から見て、この小部屋は中世早期(6～7世紀頃)に建設されたことが明らかになった。この壁を軸に発掘範囲を南に拡大したところ、スファ(ベッド状遺構)を備えたアイワーン式的大型ホール(Room 2)と、ホールの南西側に小部屋(Room 1)が確認され、当該テパは建物であることが明らかになった。形状および出土遺物から、この建物はゾロアスター寺院と推測された。6世紀前半(第一建設期)に建設され、7世紀に改修された(第二建設期)ものと見られる。建物の南側は後世に利用されたため遺構の一部は残存していなかった(図3、4)。

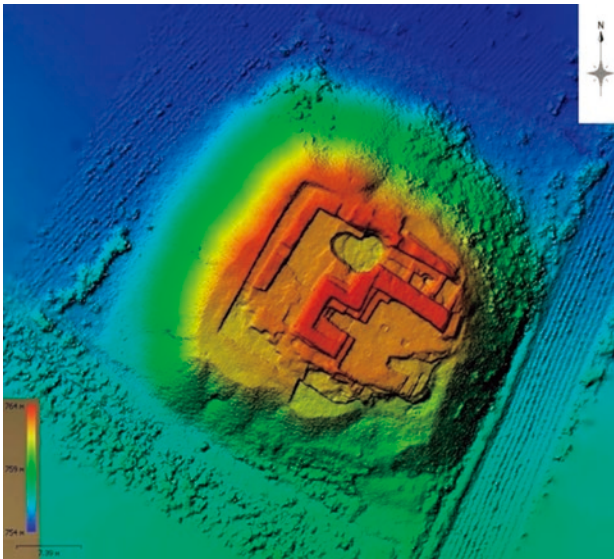


図3 円形丘の3次元モデル図

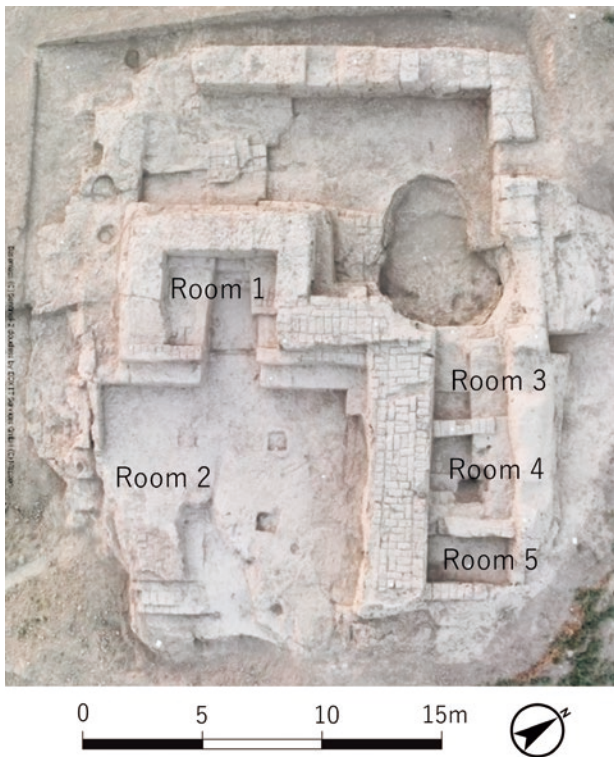


図4 トレンチ8平面図

Room 1(祭壇室)

Room 1(約3.4×4.15 m)は建物の中で最も重要な部屋と見られ、第二建設期の7世紀に設けられたものと考えられた。部屋の奥には二段からなる階段状の遺構が確認された。一段目は強く被熱を受けており、拝火のための容器が置かれていたと推測された。階段上からは3点の貨幣が出土しており、保存状態は良くないものの、サイズなどから7世紀末～8世紀初頭のソグド貨幣と推定された。これ以降の年代の貨幣は確認で



図5 漢代鏡(四葉座内行花文鏡)



図6 漢代鏡の書き起こし図(Munira Sultanova 氏作図)

きないことから、この建物は8世紀初頭にソグディアナがウマイヤ朝に支配される頃には機能しなくなった可能性が高い。Room 1の南壁には幅1.4～1.9 mのスファが配置されており、漢代鏡(四葉座内行花文鏡)(図5、6)と2点のソグド貨幣が出土した(図7)。また、床からは保存状態はよくないものの壁画断片が出土した。床には当初は焼きタイルが敷かれていたが、後に粘土敷きに改修されたことが明らかになった。



図7 ソグド貨幣

Room 1の入り口は東側にあり、入り口の幅は1.2mであった。形状からみて入り口はアーチ式であったと考えられる。さらにこの部屋の西側には通路が存在することも明らかになった。こうした遺構の全体構造はペンジケントの寺院やジャル・テパ寺院と類似しており、被熱痕や漢代鏡、壁画などの出土遺物からも、この部屋は拝火壇を備えた祭壇室であり、この建物がゾロアスター寺院であることを示すものと考えられた。

Room 2(ホール)

建物の中心をなすRoom 2は大型のホールと考えられる。壁は分厚く、東西に約9.7mであった。この壁はホール西側のRoom 1の壁と繋がるように第二建設期に改築されていた。壁の西端にはスファが設置されていた。この分厚い壁は、本来はテパの南側にあったとみられる東西方向の壁と繋がり、凸字を成していたと考えられる。壁の観察から、このホールは建設当初の6世紀に作られたものと推測している(図2)。

ホールの入り口はテパの東部にあったと考えられるが、テパの端部であることから崩壊し残存していない。しかし、入口にあたと推定される個所から、長さ約4.75mの丸太が倒れた状態で出土した。これが柱であったとするならば、寺院の天井は5mに届くほどの高さであったと推定される。柱穴は3か所に確認できるが、部屋の大きさからみて六つ存在していたと推測される。出土遺物などからホールの建築年代は第一建設期の6世紀前半と考えられる。

Room 3・4・5(小部屋)

建物の北東部では三つの小部屋(Room 3・4・5)が確認された。それらの西には、円形に掘り下げた址が

見られるが、出土遺物から恐らく90年代以降に何らかの目的で掘削されたことが明らかになった。小部屋の機能については今後類例を参照するなどして検証していきたい。

北西部

Room 1の北西部からは、3列の日干しレンガ(44～45×22～24×8～9 cm)からなる遺構(2.15×1.35 m)が確認された。レンガのサイズから見て、7～8世紀頃に建造されたものと推定できる。レンガの下からは薄く堆積した火災層が確認された。このレンガ遺構の南からは人骨が完全な状態で出土したが、出土遺物を伴わないため、埋葬年代などについては不明である。人骨は本来の寺院とは無関係と見られ、寺院の機能が廃れた後に埋葬されたものと考えられる。

南部

テパの南部は16～18世紀頃に一時的に利用された遺構があり、寺院の壁はこの遺構により破壊され残存していない。ここからは少量の土器片や骨などの遺物と、数か所の穴が確認された。出土遺物から、この層の下には寺院建築以前の4世紀頃の遺構があると見られる。この丘がいつ頃から利用され始めたのかを明らかにするため、今後さらに調査を進める必要がある。

5. 出土遺物

トレンチ8からは大量の動物骨と少量の土器片、建築材と見られる大型の木材などが出土したほか、特筆すべき遺物として、小像やソグド貨幣(図7)、漢代鏡(四葉座内行花文鏡)(図5、6)などが出土した。これらは現在、クリーニングおよび記録作業を進めている。

貨幣3点は保存状態が悪く、銘文を解読できないこ

とから年代を判定することが難しいが、サイズなどから見て7世紀末～8世紀初頭のものであることが分かった。保存状態が比較的良好な貨幣2点は、漢代鏡と同地点から発見された。これらはオククルトチャムク王(7世紀頃)の貨幣であることから、漢代鏡は少なくとも7世紀まで利用されたものと推測している。

完形品の漢代鏡(四葉座内行花文鏡)は、保存状態はそれほど悪くないものの、鏽の浸食により漢字と見られる文字や記号が明瞭でなく、これまでのところ類例は見いだせていない。中央アジア製の鏡としては模倣度が高く、一見すると1世紀頃の中国製に見えるが、製作地については鉛同位体比分析や蛍光X線分析結果を比較するなどしてさらに検証していく必要がある。

Room 1とRoom 2からは細かな壁画片が数多く出土した。文様を確認することはできないものの、青、赤、白色などの顔料が使用されていることが確認できた。

6. おわりに

今回の発掘調査では、円形丘上に建物が確認されゾロアスター寺院と推測されたこと、漢代鏡が発見されたことなど、非常に重要な成果が得られた。ペンジケントの寺院と類似する建物構造、拝火壇と見られる祭壇と壁画を備えた部屋、祭壇から出土した漢代鏡などの状況証拠から、この建物はゾロアスター寺院である可能性が高い。ソグディアナにおいて寺院の発見は数少なく、非常に重要な発見であると共に、漢代鏡や貨幣などの重要遺物が出土したことから、今後さらに遺構・遺物の検討を進めていきたい。

今回の調査で確認された6～8世紀の寺院の下には、寺院建築以前の4世紀頃の遺構があると思われることから、次年度は当該テパの調査をさらに進め、クルドル・テパ遺跡の性格を明らかにしていきたい。

謝辞

本調査に際してご協力くださったサマルカンド考古学研究所の皆様、漢代鏡の調査に際してご協力・ご助言くださった伊藤幸司先生、成瀬正和先生、大谷育恵先生、M. Reutova先生、B. Boliev先生、M. Sultanova先生、出土木製品の調査に際してご協力くださった早川尚志先生、三宅美沙先生に感謝申し上げます。

※本研究は2023年度三島海雲記念財団人文科学部門研究助成およびJSPS科 研 費 23K00928、JP23H00703の助成を受けた成果の一部である。

参考文献

- ・ Begmatov A. 2021. Two Sogdian Toponyms in Arabic and Chinese Sources, and their Attestation as Commodity Terms in Sogdian and Uyghur Economical Documents. University of California, Irvine, DABIR N8, 1-6.
- ・ Berdimurodov A., Saidov M., Sandiboev A. 2018. 2018 yilda Quldortepa mudofaa devorida olib borilgan arxeologik qazishmalar hisoboti. Arxeologik tadqiqotlar instituti arxivi. F. 4, O. 1, D. 366. Samarqand.
- ・ Ставиский Б. Я. 1960. Раскопки городища Кулдор-тепе в 1956-1958 гг. СА № 4.
- ・ Ставиский Б. Я., Урманова М. Х. 1958. Городище Кулдор-тепе (Работы 1955 г.) СА, № 1. Saidov M., Kim H., Kang J. W., Aslanov A., Cho S. G., Berdimurodov A., Badriddinov D., Kadirov T. 2020. Quldortepa yodgorligida olib borilgan tadqiqotlar. O'zbekistonda arxeologik tadqiqotlar 2018-2019 yillar, Samarqand, 272-278.